

海を渡った鷹見泉石像

明治43年春、古河。

とある屋敷から、一幅の美術品が持ち出されようとしていた。手慣れた様子で作品を梱包した一行は、古河駅を発つ上野行き汽車へ乗車する。そしてその作品には、1万円もの高額保険がかけられていた……

いささか探偵小説

調になりましたが、この年、古河に所在していたある著名な美術作品が、英国、倫敦まで旅をして、およそ1年後に帰郷したというのは作り事ではありません。作品の名は、「鷹見忠常肖像」。申し上げるまでもなく、私たちに馴染み深い、あの国宝「鷹見泉石像」のことで

す。うどん1杯1銭の時代、保険金額1万円というのですから、その評価のされようをかいま見ることができるとしよう。

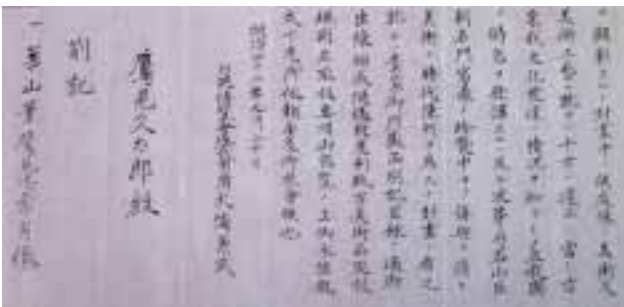
1902（明治35）年1月30日、「日英同盟」が締結されます。近代史上でも重要とされる出来事ゆえ、ご存じの向きも決して少なくないでしょう。泉石像の英国渡航は、日英同盟記念として開催された大博覧会に出陳せられるためのものでありま

した。

すなわち、明治42年8月、政府は、国家事業として、「日英博覧会」の開催を発表しています。その目的は、文化や産業の状態と古美術・文教の歴史や変遷、産業の発達、交通・兵制・諸制度の沿革、風俗の変遷等々を通して

日本における国運発達の歴史を明確にしようという、大層欲張ったものでした。

なかんずく「古美術品」＝文化財の展示は、日本文化の特色と独自性を通して、いわば日本の存在証明をしようという、極めてスケールの大きな構想であつたようです。国家を代表して英国、倫敦へ渡った泉石像、さながら国の威信を背負って参加する五輪選手のようではありませんか。



日英博覧会出品依頼状（鷹見家歴史資料・市指定文化財）

ところで、「冒頭の」とある屋敷念館のこと。後に「国宝」の称を冠せられるこの絵は、その床の間を飾り、来客の人々を迎えていたと伝えられています。

「鷹見泉石展」は10/22～11/23